

移住者目線での移住促進に向けた情報発信に関する研究

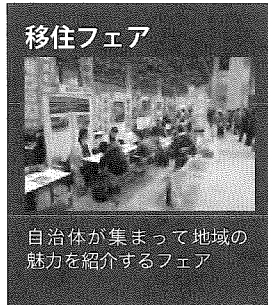
常葉大学 造形学部 安武研究室（未来デザイン研究会）

指導教員 教授 安武伸朗

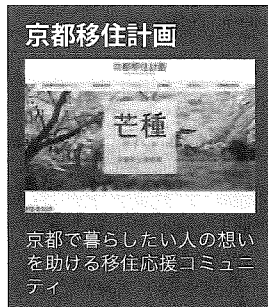
参加学生 福土夏季、小野寺夏海、水谷みなも、川口彩花、古本友佳理、松田美沙



2015年度発行版 移住促進パンフレット



視察を繰り返し、相談者のニーズは多様だが、就職と住まいの情報は重要だと分かった。



代表者の話から「移住を支えるしくみ」について、ビジネスとコミュニティから再検討した。



代表者やメンバーの話聞き、「生き方を探す」尊さと「移住した仲間が支えあう」コミュニティの大切さを実感した。

(1) 背景 平成25年度「静岡生活」の開発と発行

平成25年度、静岡市は人口減少対策の一環として、都心からのU,Iターン者を獲得するための情報提供として、常葉大学 安武研究室および未来デザイン研究会と協働で、顧客視点でのコミュニケーション活動「静岡生活」のパンフレットを開発した。

利用対象者別に【基本情報編】、アクティブシニア対象の【新しい自分に出会いたい編】、30代子育て世代向けの【変わりたくない、でも、変わりたくない編】の3部で構成される。

(2) 課題1 暮らし情報の必要性

東京からの移住希望者は子育て世代が増加する傾向にあった。また担当学生による東京の「移住センター」でのイベント現場の観察やスタッフへの取材、静岡市が主催するワークショップやシンポジウムの現場での観察から、移住を検討する人たちが実感できる暮らし情報の提供が必須と思われた。

(3) 課題2 地域コミュニティ創設の必要性

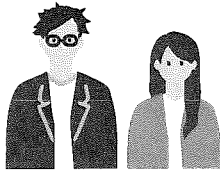
行政からの情報提供や移住勧誘と異なり、地域のNPOやコミュニティと行政が協働する活動が増えている。担当学生による「京都移住計画」「福岡移住計画」の取材からは、移住した人、する人、迎える人たちが新しい地域コミュニティをつくり、ビジネスと相互扶助の場が生まれている。高いシナジー効果があると思われた。

(4) 研究の目的 ツールの開発と場の提案

私たちは「静岡市を再生させる力=多様な価値を生み出すような生活者」を獲得できるコミュニケーション戦略=サービスデザインを企画+実装して、「静岡生活」を補填することが必要ではないかと考えた。

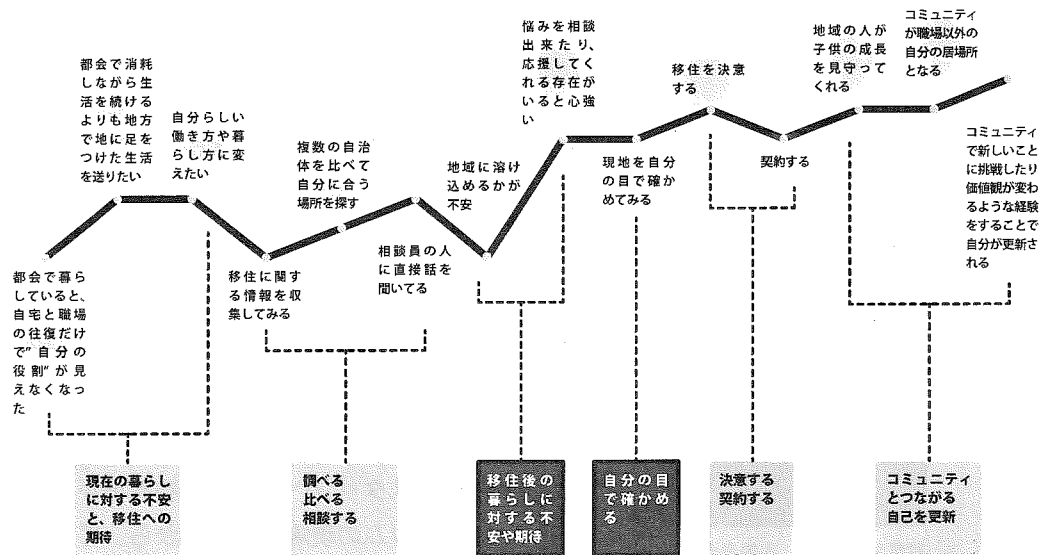
- ①移住希望者の心情にそったコミュニケーションを企画・実践
→パンフレットやWebを開発・発行し、移住希望者と静岡市が提供する情報やサービスをつなぐ
- ②移住者によるコミュニティ創設に向けた仮設の場づくり
→行政と移住した人たちが情報を共有できるシンポジウムを設計する

(5) 研究内容：コミュニケーション対象（ペルソナ）



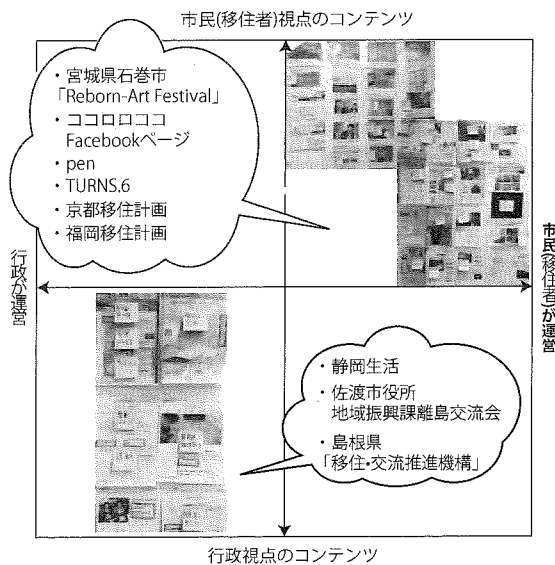
【都内在住の30代夫婦】

都会で消耗しながら生活することに違和感を感じ、自分らしい働き方や暮らし方を考えるようになった。新しい自分に出会うために地方への移住を検討しているが、webやパンフレットなどで情報収集してみたものの実感の得られるものがないので困っている。



(6) 研究内容：コンテンツの検討

市民や移住者が中心になって運営・情報発信を行い、移住希望者が本当に知りたいリアルな情報を提供できるメディアの開発



起業の仕方

- ・経営の苦勞
- ・お店の始め方、続け方
- ・起業に必要なもの
- ・起業前後の歩み

情報収集方法

- ・地区のピンポイント情報
- ・街作り情報
- ・イベント情報
- ・移住者と業者を仲介するシステム
- ・コミュニティスタッフが収集した不動産情報
- ・情報収集の仕方

移住先での仕事と収入

- ・収入
- ・ライフワークバランス

地域の人々との交流方法

- ・市民が運営するパブリックスペース
- ・市民主催イベント
- ・町の方々とのコラボイベント
- ・クリエイティブスペース
- ・ご近所付き合い
- ・地域活性化参画
- ・移住地への溶け込み方
- ・地域の人との交流のきっかけ
- ・市民が考える地域の魅力

移住先でのリアルな体験談

- ・先輩移住者の声
- ・人生のターニングポイントと暮らし
- ・移住の失敗、原因
- ・移住先の人々
- ・移住して1年後のリアル
- ・一日の流れ

(7) 研究内容：「静岡の嬉しい暮らし方」の編集と発行

静岡で働く、住まう、こどもを育てる、くつろぐ、遊ぶ、旅をする。東京から移住した人、地元を元気にしたい人、新しい仕事を立ち上げた人、そんな新しい静岡の人の「嬉しい暮らし方」を大学生が訪ね、リアルな暮らしを紹介する。

「自然たっぷりの環境で、
親も近所も助け合うのがいい」暮らし方。

京井麻由

野外保育ゆたか代表

「地域のハブをつくり、自分たちが
静岡の個性を育てていく」暮らし方。

中村光太

**CoCoRu オーナー兼運用者
公認会計士**

「仲間と関わりながら、
静岡に貢献できる仕事をする」暮らし方。

古木直人

**COTERRACE 七間町入居
BeNX web デザイナー**

「街に興味を持ちながら、出会いや
変化を楽しむ手触りのある」暮らし方。

井上泉

シズオカオーケストラ発起人

「こどものため、自分のために、
毎日を味わう」暮らし方。

福嶋 規之

東京のIT関連企業から
静岡のインフラ系企業に転職。

「自然や人との出会いの中で、
もっと楽しみを見つける」暮らし方。

能登原 信行

全国チェーンのホテルに就職し、転勤
で静岡に。その後

「こどもはこどもらしく、
大人は大人らしく遊べる」暮らし方。

浅原さんご夫婦

子育てを機に東京から1ターン
で草薙に移住

3つの区の 暮らし方。

エリアごとの魅力を知る

住んでいるからこそ分かるその街での暮らしの楽しさ。
私たち大学生編集員のエピソードとともに紹介。

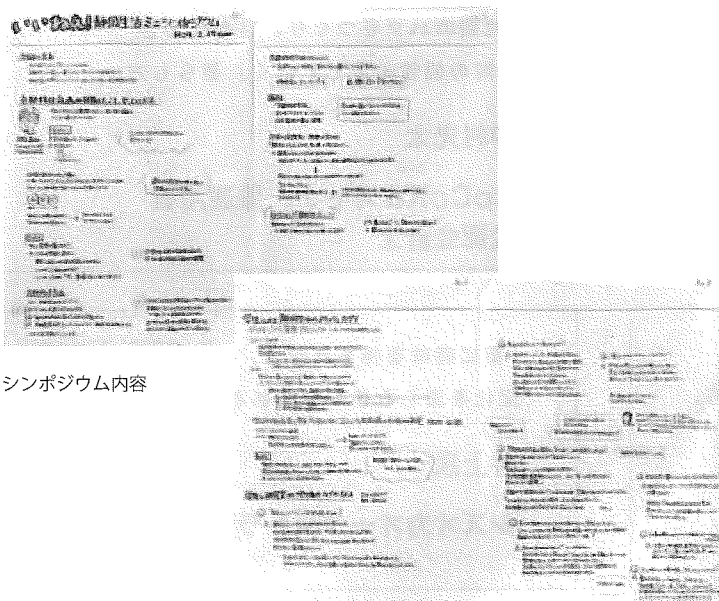
データから見える 嬉しい暮らし方。

静岡市のネットワーク
静岡市の生活環境項目(インフラ)
創造的な都市ランキング 静岡市2位/21都市
Sensuous Cityランキング 静岡市12位/134都市
自転車のまち 静岡
静岡県のサッカーチーム数

(8) 研究内容：「自分らしい静岡生活」を考える・ミニシンポジウムの企画と開催

「自分らしい静岡生活」について考える2時間を計画。

移住について先進的で温かい取り組みを続けてこられた「京都移住計画」代表の田村篤志様を招いて、移住する人、迎える人で生み出す暮らしとビジネスの可能性を話し合いあうシンポジウムを企画、開催し、20余名が参加した。



シンポジウム内容



シンポジウム広報チラシ

(9) 研究の成果

1 当初の計画

- ①移住希望者の心情にそったコミュニケーションを企画・実践
→パンフレットやWebを開発し、移住希望者と静岡市が提供する情報やサービスをつなぐ
- ②移住者によるコミュニティ創設に向けた仮設の場づくり
→行政と移住した人たちが情報を共有できるシンポジウムを設計する

2 実際の内容

- B 一部変更：本情報のWeb（いいねえ、静岡生活）への転用は、管理における技術的な課題を伴うため、再検討する。

3 実績・成果

移住者にとって、暮らしの実感が持てるような情報提供に関して、専門知識を持った学生が共創することで、行政だけではできない「共感」を生み出すことができると思われる。以下が根拠である。

- ①UX（顧客満足）デザインの専門理論を活用し、利用者の調査・分析を行い、期待を満たすことができるような情報を選択している。
- ②東京の移住センター、移住フェアのイベント、「京都移住計画」、「福岡移住計画」、各種メディアなど、移住推進や移住者の暮らしに関わる各種団体と連携をとることで、メタ視点による情報の構築ができています。
- ③多様な移住者の方々との信頼関係を気付くことができ、本人たちの思いや葛藤を取材できています。
- ④シンポジウムという場で、移住者同士の交流や他地域の方々との情報交換が生まれ、移住者によるコミュニティ醸成の大きなきっかけとなっている。
- ⑤グラフィックデザインの専門技能を生かした、「見て嬉しい」「持って嬉しい」大判サイズの冊子発行により、他地域の移住推進の試みとの差別化が生まれる。

4 今後の改善・対策

- ⑥京都移住計画のような、移住者が移住をサポートするコミュニティを設立し、ビジネスの軌道に乗せるためには、さらに静岡市での人的交流の場や多様な人々が集う機会を生み出すことが必要と思われる。
- ⑦Web「いいねえ、静岡生活」による情報の継続的な構築が必要と思われる。

発行物
 「静岡の嬉しい暮らし方」
 平成 29 年 2 月 28 日発行
 A3 サイズカラー
 20 ページ
 600 部



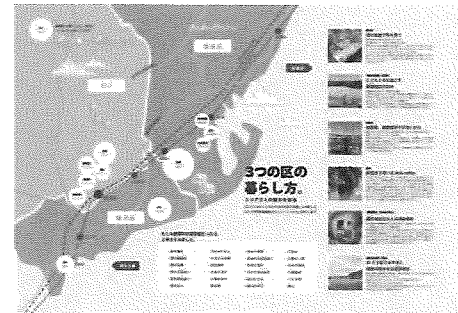
表 1, 表 4



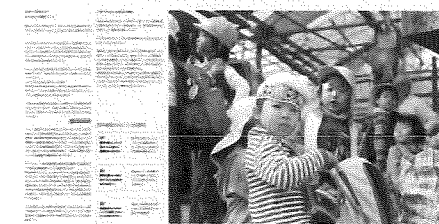
p9-10



p1-2



p11-12



p3-4



p13-14

シンポジウム
 「自分らしい静岡生活」
 平成 29 年 2 月 19 日
 Den Bill 2 階会議室
 23 名参加



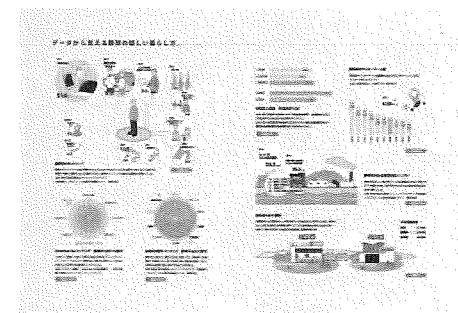
p5-6



p15-16



p7-8



p17-18

